豊かな人間性を育てる性教育

木　村　美登里

1．はじめに

(1) 性教育の役割

元来，性の問題を抜きにして，人間そのものは考えられない。男性と女性とが別々の個体として存在し，それが1つの社会を構成しているのであるから，性教育は，お互いの性的役割の中の性的な差（肉体的且つ，精神的な）を正しく理解することにより，社会生活を豊かに送ることができるための教育であると考える。学校教育の中での人間教育として，また，生涯教育として意義深いものであり，必要であることは言うまでもない。

昭和48年の，広島県教育委員会の編集による「性教育の手びき」の中での，性の状況では，

(1) 現代の児童・生徒の発育発達はすばらしく，それに伴って性の成熟も非常に早くなり，一方寿命が延長し，閉経期も遅延するに従って人生における性生活の時期は大幅に増加しつつあること。

(2) 性の目的は生殖にあり，よい子孫を残すためによい配偶者を選び，健全なる家庭生活を営むこととされてきたために隠ぺいされていた。もともと，両立するもう一つの目的である性の享楽が浮上したこと。

(3) 避妊薬や避妊技術が確立し，性の快楽面が男性はもちろん女性にも権利として強く主張され，性行為の結果として妊娠する可能性が否定されたことで，女性の性の開放を大きく推進させたこと。

(4) 抗生物質の発見とその治効で，性病の恐怖が激減したのを始めとし，自然科学，社会科学の発達により，性も人間の生理現象として，また，社会現象として安全と考えられるようになったこと。

(5) 家族構成や社会構造の変化から連帯意識は薄らぎ，個人的にも肉体と精神の分極化から性の価値観が急速に変わってきたこと。

(6) ジャーナリズムの進展，コマーシャリズムの浸透により，性の風俗化，商品化が進んできたこと，また，これと並行して，性の表現がエスカレートしつつあること。

の6項目が掲げられている。この手引きの刊行から，17年が経過しているにもかかわらず，上記の諸問題は，そのまま現在の状況と何ら変わりはない。これらは，歳月が経過すると共に，1つ1つの問題は更に深刻化しているとも言える。

「性教育というのは，直接に間接に，青年にはあたりまえの人である限り，何かの形でいつかは生活の問題となってくるにちがいない性の諸問題を，自身で解決するだけの準備を得させる為に助けとなるような，あらゆる科学的な，倫理的な，社会的な，また宗教的な教育を指すのである。」これは，大正13年に翻訳された「ビゲロウの性教育」の中での，性教育の定義である。性に対する認識，あるいは道徳観は，時世の移り変りによって多かれ少なかれ流動するものではあるが，男たる，女たるとを問わず，一人一人の人間性を豊かに育てたいとする願いは，性教育の基本理念として今も昔も変わらない。

無責任で一方的な性情報が氾濫する現在，人生の最初の転機である思春期を豊かに過ごしてほしいという思いを込めて，教師としてよりむしろ，子どもたちの“今”に関わりを持つ大人の責任として，本校の性教育に携わっている。

(2) **性教育のねらい**

小学校高学年になると，成長の早い者，遅い者の個人差は大きいにしても，この頃からほぼ14歳迄には，第二発育急進期（思春期スパート）という時期に突入する。この時期は，外見上の変化（身長，体重の増加）も著しいが，身体の内部的発育の面，すなわち，内分泌系，呼吸器系，神経系などの生理的構造や，機能の面においても，最も発達の著しい段階に達する。子どもたちは，好むと好まざるとにかかわらず，それぞれの二次性徴を迎えなければならない。性の問題は，第三者的な立場ではおられず，自分自身の問題として，自分自身が解決せざるを得ない事態に迫られる。正しい知識を持っていない場合，身体の成長における変化は，不安や悩みの原因となり易い。また高学年に進んでいくうち，皆より早く二次性徴を迎えた者にとっては，少数派であるということも手伝い，好奇の目で見られたり，仲間はずれの一因となることもある。以上のことから，性教育のねらいとして，

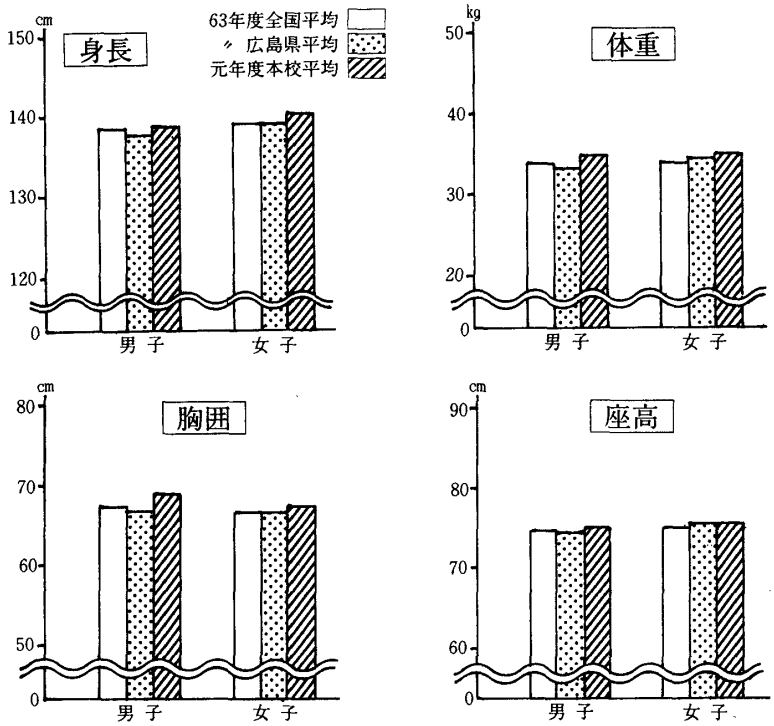
○　二次性徴の発現に伴う不安や悩みの解消を図り，自己の性の認識を確かにさせるとともに，異性に対する理解を深めさせる。

○　発育や二次性徴には個人差があるが，すべての人が人間として尊重されなければならないことを理解させ，思いやりのある態度や行動を身につけるようにする。

「人間は学習することにより人間となり得る」と言われるが，より人間らしく生き生きと“生きていく生命”を子どもたちのものにするためには，“知性”とともに，人間らしく生きていく“方向性”と“意欲”を持たせなければならない。“性”という文字が表しているのは，“心”と“生”である。性の学習は，“心が生きていくための学習”であり，言い換えれば“心を育てるための学習”であろう。単に身体の成長と，それに繋がる生殖を教えるのではなく，理想的な性の価値感を形成するための人間教育と言える。

(3) **本校の児童の実態**

本校では，第５学年を迎えると，小学校生活の最初の宿泊学習である「海の学習」が行われる。岡山県玉野市の青年の家で，地引き網やカッター訓練等の海事研修を２泊３日の期間で体験する。



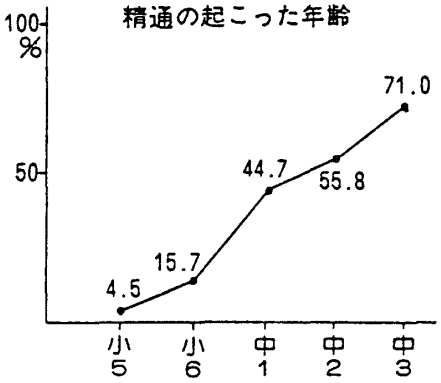
〈図１〉本校第５学年児童の体位の全国平均，広島県平均との比較

「海の学習」が迫ると，子どもたちは事前学習に取り組むが，その学習の１つに「性指導　からだの成長について」を位置付けている。

本校の第５学年児童については，体位は図１のとおりで，全項目とも，全国平均，県平均を少しずつ上回っている。しかし，日常の生活においては，男子の言動には多分に幼なさが残り，学級，あるいは学年を統率できるようなリーダーが存在せず，小グループで行動している様子である。また，女子については，相性が顕

著で，気が合う者同志のグループに分かれ，時にはグループ同志の対立もあり，構成メンバーは，ほぼ変わることなく過ごしている様である。身体の変化では，男子の中では変声期を迎えた者が若干いる程度で目立った変化はないが，女子は，４年の２学期頃から乳房が膨らみ始め，５年に入ってからは，初経を迎えた事を報告する者も出てきた。

〈図２-①〉(「こんにちは性教育」より)

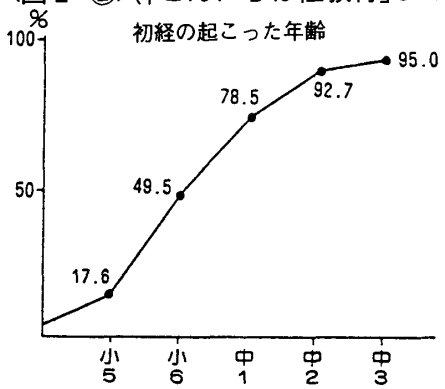


全国的な平均においても，精通，初経の発現が，第４，５学年である（図２）。二次性徴の発現の前に指導を実施するべきか，あるいは，ある程度の身体の変化を認めることができ，自分の問題として，身近にとらえられる時期が良いか等，指導の時期については，まだまだ検討の余地があるが，他の行事とも考え合わせ，現在の方法をとっている。

２．指導事例「からだの成長」

(1) 指導にあたって

〈図２-②〉(「こんにちは性教育」より)



現在，子どもたちの指導にあたっては，アーニ出版のスライド「からだの話　なぜ？」「成長の話　なぜ？」「生命ってふしぎだね」を使って実施している。既製の教材は，多種多様なものがそろってはいるが，所要時間が長く，子どもたちの集中力が続かないものや，内容的に，女子に関しては，生活面，精神面等の細かい配慮がなされているが，男子に関しては物足りなさを感じたり，使用している言葉が，性的な名称に暗さをイメージする“陰”という文字が使われていたりで，なかなか適当な教材が見当たらなかった。本教材は，上記の問題を満足させているのと，すべて貼り絵で構成されている為，人体図がリアルになり過ぎることもなく，第５学年という発達段階とも考え合わせ，適当ではないかと考えている。

指導の事前には，学級担任との打ち合わせを何度か持ち，指導内容についての共通確認を行った。その結果，１時間目は「からだの話　なぜ？」と「成長の話　なぜ？」を，２時間目は「生命ってふしぎだね」を使っての全学年一斉指導を，３時間目は男女が分かれ，男子は男性である学級担任が，女子には養護教諭が，身体の変化を迎えた時の適当な処置の仕方を指導した。また，保護者に対しては，学年での懇談会において，養護教諭が指導の報告を行うこととなった。

(2) 指導の実際

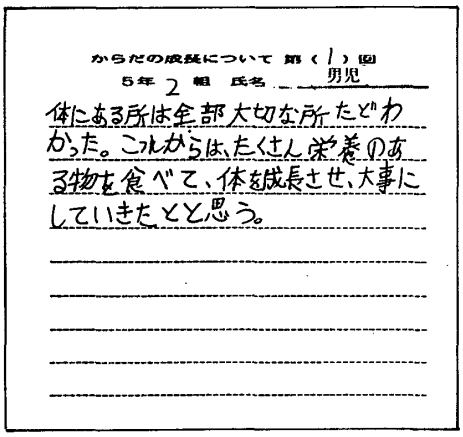
① 「からだの話　成長の話」

本指導は，前述のスライド「からだの話　なぜ？」と「成長の話　なぜ？」を使い実施した。

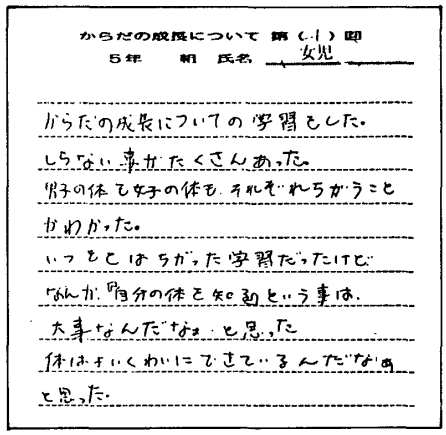
「からだの ― 」は，内容的には，低，中学年向きだが，自分たちの身体についての導入教材として親しみ易く，低，中学年で性指導を受けていない子どもたちが，気負うことなく視聴できる内容である。その要旨は，身体の役割，例えば「目は何をするところ？耳は，目は，鼻は…」と展開していく。そして「おちんちんは何のためにあるの？」「男の子と女の子のからだはこんなに違う」と，表面的な性差を押さえた内容となっている。「成長の ― 」は，身体内部の器官，いわゆる心臓，肺，胃や腸等の各器官の働きとともに，生殖器官も同じく重要であることに気付かせ，また，生殖器官の発達に伴う変化（二次性徴）の発現に発展する。以上２つのスライドの視聴による子どもたちの感想である。(次頁の図３参照）その他，からだのことをもっとたくさん知りたい…２名，各器官の正しい名称を知った…２名，あまりよくわからなかった…１名等，日常あまり気に留めてい

なかった自分の身体について再認識できたという内容の感想が大部分であった。また，二次性徴を自分自身の問題として受けとめるきっかけになり得たようである。

児童の感想①


からだの成長について 第（1）回
5年 2 組 氏名 男児
体にある所は全部大切な所だとわかった。これからは、たくさん栄養のある物を食べて、体を成長させ、大事にしていきたいと思う。

児童の感想②


からだの成長について 第（1）回
5年 組 氏名 女児
からだの成長についての学習をした。
しらない事がたくさんあった。
男子の体も女子の体もそれぞれちがうことがわかった。
いっぱいはちがった学習だったけど
なんか自分の体を知るという事は、
大事なんだなぁ と思った
体はすごくわいにできているんだなぁ
と思った。

尚，本時の指導において，以下の２点に留意して実施した。

○ 身体の発育には個人差があり，各々の発育段階を持っている。それはお互いの個性として尊重し合う。

○ 生殖器官の正しい名称や性的な言葉を，遊びや悪ふざけで使ってはいけないことを約束する。

学習でわかったこと（感想文より）

①からだにあるものはすべて大切	43名
②からだの各器官の働き	24名
③男子と女子のからだの違い	12名
④いやらしいと思っていたのはまちがい	10名
⑤からだを大事にしなければならない	8名
⑥からだの働きは不思議	5名

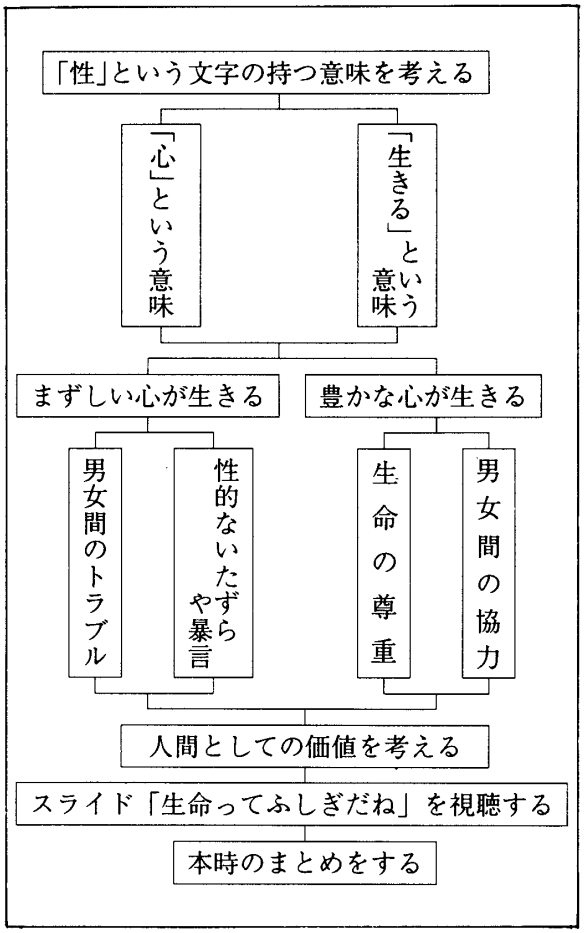
〈図３〉

② 「心の学習　生命ってふしぎだね」

この時間の指導の導入は，性の学習の持つ意味について話し合った。“性”という文字は“心”と“生きる”という意味を持った字で構成されている。性の学習は，単に生殖機能を知るとか，月経，精通の処置方法の学習ではなく，心を育てるための学習であることに気付かせたかった。「心」について，「豊かな心」と「まずしい心」とに分け，まず「まずしい心」について考えさせた。例として「私と彼とそのあいだ」（安達倭雅子著）の中の一節をとり上げた。この著者は「こども110番」の相談員であり，子どもから受けた相談を一冊の本にまとめたものである。その一節とは，女の子が教室で，誤ってナプキンを落としてしまった。それを目敏い男の子が見つけ，あたかもキャッチボールかバスケットのパスのように，ナプキンを思い思いに投げ，女の子をからかった。その一件で女の子は，「死にたい，学校へ行けない」と泣きながら電話をしてきた，という内容である。朗読する間，子どもたちは大変神妙な顔つきである。時々，女子から「えー，かわいそう」「ひどーい」というつぶやきが洩れる。自分たちにとっても身近な出来事であるため，人事では済まされないのだろう。好奇心が先走りし，クラスの仲間に対し，思いやりの持てない男の子。“知らなかったから”という理由がまかり通るのなら，それは彼らの回りの大人の責任である。この話をきっかけに，子どもたち一人一人がナプキンを手に取って見ることになった。「やわらかいね」「こんなものなのか」と，めずらしそうに手に取る男子，少々戸惑い気味の表情を見せる女子。“知らないから，知りたい”という，学習するということにとって最適の時期に，子どもたちの周りに“相談する大人”が存在しない場合，どうなるであろうか。雑誌やテレビ，ラジオ，あるいは学校の先輩が，たちまちの教材となる。それが適当なものであればよいが，暴力的な性が主流となっている今日，誤った知識に陥り易いのは言うまでもない。記憶に新しい，幼女の誘拐殺人や，女子高生の監禁，殺人，また身近なところで起こった性被害を例にとり，まずしい性知識を持つことが，まずしい心を育てることに繋がることを話した。身体のことを知ることにより，身体を大切に思う心が育ち，それが自分だけでなく，他の人をも大事に思う心を育てる。一つ一つの命を尊重する心，大切に思う心が「豊かな心」であることに気付かせたかった。

学年指導　2時間目

「心の学習 生命ってふしぎだね」の指導の流れ



この「心の学習」後，スライド「生命ってふしぎだね」を視聴した。このスライドの内容は，受精のしくみを，魚類，鳥類，哺乳類，そして人間の場合について説明している。ただ，人間の場合は“愛と責任”という，人間特有の感情に裏付けされた行為であることを強調している。また，卵子や精子，受精卵，胎児の様子の写真もあり，子どもたちにも理解し易いようであった。この指導後には，「心」についての感想が多く見られた。

わたしもいろいろ疑問があって，その1つがやっとわかりました。それはどうやって赤ちゃんを作るたねがお母さんの中に入るのかということです。(女子)

いろいろなしくみを知ったら，へんなことはできないな，と思った。ぼくは，豊かな心になろうと思います。(男子)

今日の学習で「生きる」ということは，とっても大切なのだと思いました。動物も人間も命を大切にあつかわなければならないと思いました。まずしい心にならないよう，どりょくしなければならないと思います。ゆたかな心になろうと思いました。(女子)

今日は「性」という意味をならいました。↑は「心」で生は「生きる」ということです。ふたつを合わせて「心が生きる」です。いいことをききました。(男子)

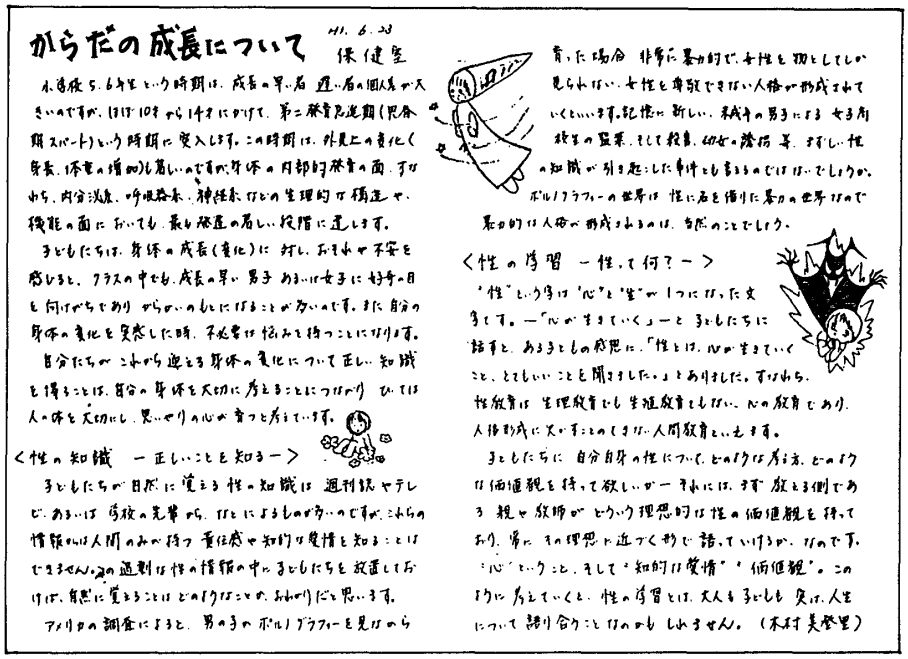
③「からだの成長　まとめ」

2時間の指導のまとめについて，この時間は男女別に実施した。男女が別々に学習することに対し，子どもたちが違和感を持たない為に，前時の終わりに，男女別の学習を行う旨を告げた。その理由として，男子，女子がこれから迎えるであろう身体の変化に対し，より具体的な対処の仕方（月経の手当て，夢精の処置等）を，それぞれ男子教諭，女子教諭の指導により学習するため，それから自分たちが，“男として，あるいは女として”の疑問，質問あるいは相談がある場合は，その時間に提起してもよく，その場合，男女別の方が発言し易いと考えられるため，の2つを揚げた。それまでの2時間を男女が一緒に学習したとしても，最後の指導により，「男子（女子）は何をやっているんだろう」というような，好奇心的な印象を持たせてしまってはいけない。恥ずかしいことではないが，お互いのエチケットとして，男女互いの性を尊重する意識を自覚させる意図もあった。「からだの成長について」の学習は，これが最後の時間というのを，子どもたちも強く意識しており，指導後の感想には，いくつも「最後だから，しっかり聞かなくてはと思った」とか，「もう，いつなっても，安心です」といった内容のものが見られたが，新しく湧いた疑問，相談もあり，今後の個別指導の必要性を強く感じた。

④　保護者との共通理解

指導した第5学年児童の保護者（主に母親）が集まる機会に，学校で実施した性指導の内容を，スライドと共に報告した。また，次ページのプリントを配布し，指導の意図を理解してもらうよう図った。子どもたちが学校で学習して帰った事を，家庭に持ち帰った時に，それを否定したり

保健室から保護者へ



からだの成長について

H1. 6. 28
保健室

本学校5・6年生という時期は、成長の早い者、遅い者の個人差が大きいのですが、ほぼ10才から14才にかけて、第二発育急進期（児童期スパート）という時期に突入します。この時期は、外見上の変化（身長、体重の増加）も著しいのですが、身体の内部的発育の面、すなわち、内分泌系、呼吸器系、神経系、などの生理的な構造や、機能の面においても、最も発達の著しい段階に達します。

子どもたちは、身体の成長（変化）に、対し、おそれや不安を感じると、クラスの中でも、成長の早い男子あるいは女子に好奇の目を向けがちであり、からかいのもとになることが多いのです。また自分の身体の変化を実感した時、不必要な悩みを持つことになります。

自分たちがこれから迎える身体の変化について正しい知識を得ることは、自分の身体を大切に考えることにつながり、ひいては人の体を大切にし、思いやりの心が育つと考えています。

<性の知識　－正しいことを知る－>

子どもたちが日常に触れる性の知識は、週刊誌やテレビ、あるいは学校の先輩から、などによるものが多いのですが、これらの情報には人間のみが持つ責任感や知的な愛情を知ることはできません。この過剰な性の情報の中に子どもたちを放置しておけば、自然に覚えることはどのようなことか、おそれです。思います。

アメリカの調査によると、男の子がポルノグラフィーを見ながら育った場合、非常に暴力的で、女性を物としてしか見られない、女性を尊敬できない人格が形成されていくといいます。記憶に新しい、未成年の男子による女子高校生の監禁、そして殺害、40女の強姦等、まずしい性の知識が引き起こした事件ともいえるのではないでしょうか。

ポルノグラフィーの世界は、性に対する偏向に暴力の世界なので、最終的には人格が形成されるのは、当然のことでしょう。

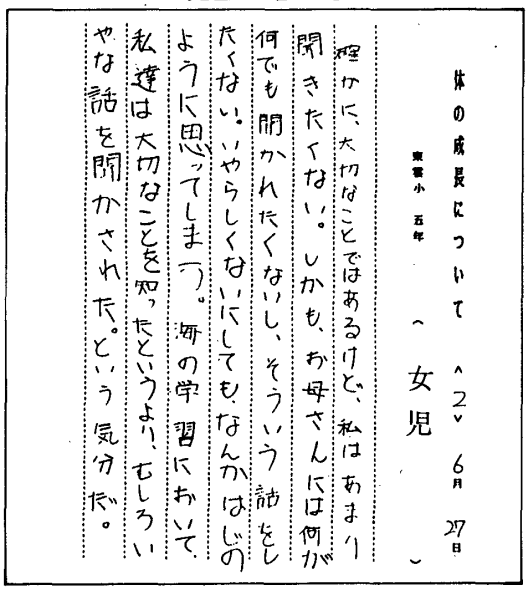
<性の学習　－性って何？－>

"性"という字は"心"と"生"が一つになった文字です。－"心"が生きていく－と子どもたちに話すと、ある子どもの感想に、「性とは、心が生きていくこと、とてもいいことを聞きました。」とありました。すなわち、性教育は生理教育でも生殖教育でもない、心の教育であり、人格形成に欠かすことのできない人間教育といえます。

子どもたちに自分自身の性について、どのように考えさせ、どのような価値観を持って欲しいか－それには、まず教える側である親や教師がどういう理想的な性の価値観を持っており、常にその理想に近づく形で話していけるか、なのです。"心"ということ、そして"知的な愛情""価値観"。このように考えていくと、性の学習とは、大人も子どもも、共に、人生について語り合うことなのかもしれません。（木村美登里）

嫌悪を示したりすれば，当然のことながら，子どもたちは矛盾に苦しむのである。左下の感想文は昨年度の性の学習後の女子の感想であるが，性をタブー視している感情が明らかである。保護者にこの感想文を読んだ後，子どもたちが，このような感情を持つことが，これからの発達段階における精神衛生上，好ましい状態と言えるだろうか，また，日本の性道徳を考えるとき，ダブル・スタンダードと呼ばれる二重の価値感（男性の性は本能であり，女性の性は第三者に管理されなければならないもの）に気付くが，男性社会が生み出したこのような価値感を，そのまま伝えてもよいものか，と問題を提起した。形式としては，スライドの視聴後，討論会の形をとりたかったが，時間が不足していたため，個人的に意見や感想を聞きたい旨を告げた。その後，保護者から2通の手紙が届いた。その内容はどちらも「家庭での性教育のスタートで，いいチャンスになった」というものであった。子どもたちからも，「お母さんに，"女の子の本"を買ってもらった」とか「生理の準備をしてもらったよ」等の報告があった。

児童の感想③



体の成長について　<2>　6月27日

東雲小　五年　<女児>

確かに、大切なことではあるけど、私はあまり聞きたくない。しかも、お母さんには何が何でも聞かれたくないし、そういう話をしたくない。いやらしくないにしても、なんかはじのように思ってしまう。海の学習において、私達は大切なことを知ったというより、むしろいやな話を聞かされた。という気分だ。

3．おわりに

性の指導に当たって，毎年痛感することは，指導者側の意識が子どもたちに対し，いかに大きな影響を与えるか，ということである。かつて，この指導に対し，抵抗を持ちながら実施した年には，数人の男子から「エロ先生」と呼ばれたことがある。性教育の指導を実施することにより，私自身の意識改革ができ，子どもたちに対しても「きちんと伝えたい」という思いは，年々強くなる一方である。

本校での性指導（保健指導における）は，現在，第5学年のみ実施しているが，生命を尊重する心を持つ子どもを育てるためには，やはり低学年からの取り組みは必須である。今後，各学年の発達段階に合わせた指導計画をまとめ，実現させていきたい。

4．引用文献（参考文献）

(1) 「からだの話　なぜ？」「成長の話　なぜ？」「生命ってふしぎだね」アーニ出版

(2) 「性教育の手びき」広島県教育委員会

(3) 「こんにちは性教育」アーニ出版